
子パンダチロル

みるこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子パンダチロル

【Nコード】

N0427L

【作者名】

みるこ

【あらすじ】

少し残酷な描写がありますが、ギリアウトかな？？ぐらいのレベルです。

リアルに書いてないです。

童話？というか低学年向けの文章かなあ。

雨の日にチロルちゃんに起こった話です。

しとしとすると、外は雨が降っています。

空も暗く。

今はお昼を回ったばかりなのに、もうすぐ日の入りかというようなどんよりした空から柔らかな雨がしとしとと降っています。

窓から外を見ていた子パンダのチロルは急に外に出てみたくなりました。

しまっておいたお気に入りの緑色のカッパを羽織り、靴箱から緑色の長靴を出しました。

チロルはこの二つのを身に付け、外に出ると自分が蛙になった気分になれました。

今蛙としてやっている蛙はずっとこの二つをずっと着けていたから蛙になれたのだとまで思っていました。

しかし2つの秘密道具（？）を持っているチロルは蛙にはまだなりたくないのです、たまに着るだけでした。

玄関のドアを開けて外に出ると、チロルちゃん以外誰もいません。

フードを取って数分で頭から水滴がたれてきました。

お風呂の時にシャワーでもやってみるのですが、どうもうまくいきません。

しかし、この水滴が落ちるじれったい感じが子パンダは好きでたまりませんでした。

何分もそうやっていると

「こんにちわチロルちゃん」

と前から声がしました。

水滴に集中していたチロルは、前にいた子狐に気づきませんでした。

「こんにちわ、きつねさん」

一応挨拶をしておきましたが、この子が誰なのか、全くわかりません。

同じぐらいの年齢だったら、毎日公園で顔を合わせます。

違っても、この村の人口はそれほど多くありません。すぐにだれかわかるはずですよ。

(この子誰だろ?)

顔には出しませんが、チロルはそう思っていました。

「あ、ぼくのことだれだろ？っていうかおでみているね」

といているようでした(ちゃんとした言葉として耳が聞き取ってくれません)。

子狐は子パンダからみて、普通の子ではありませんでした。

発音ー少し舌足らず

イントネーションーどこか北国だろうと推測される

目線ーあわせようとしない

危険だと頭から信号が出ましたが、チロルは怖くて動けません。

「ぼくをだれだとおもっている？」

「わからないでしょ？」

「だってぼくにモワカらないもの」

「ねえ、チロルちゃん、なに、かしゃべってよう」

だんだんと狐の発する言葉に間ができるようになりました。妙なところに行けるので、余計に怖くなりました。

「そうだ、チロルちゃんにともだちをしょうかいしよう」

そういって、くると向きを変えると、小走りで駆けていきました。

やっと見たことの無い狐から開放されたチロルちゃんは急いでお家に戻りました。

怖くて怖くて、早くあの狐の前から逃げたかったです。

玄関のドアを閉めて、鍵を急いでかけます。

ふう、と息をつくと後ろから声がしました。

「チ ロルちゃん、おともだちのチロルちゃんです」

「こんにちわ、チ ロルです、いっしょのなまえだね」

背筋がぞつとし、聞き覚えのある声がしました。

さっきまで、家の外にいて、逆方向に走っていた狐が今自分の家の中にいて、しかもチロルという自分と同じ名前のお友達を連れてきたなんて。

振り向くとやはり狐が立っていて、笑っていました。

そして、狐のそばにはチロルちゃんが立っていました。

お友達のチロルちゃんは、チロルちゃんそっくりの子パンダだったのです。

「どういうこと!?!」

チロルちゃんは叫んでしまいました。

「あのね それ はね」

もう一人のチロルちゃんは狐と同じしゃべり方で説明しようとしていましたが、あのね、それはねを繰り返すばかりでした。

「じかんがそれをおしえてくれるよでしょ」

狐がそう言いました。

「時間が教えてくれるの?」

こくと狐が頷きました。

「また ちろる ことば わすれて だめなこ」

「だめじゃないよ、ぼくもわすれていたもの」

二人であはは、ふふふと笑っていました。

「チ ロルちゃ んはい まのおも しろかった かい?」

「そ、そうね…おもしろかった…かな?」

ちつとも笑うところじゃなかったのに、と誤ってしまいました。が、何かされたら怖いので誤魔化しました。

「よかつ たよ かつ た チ ロルちゃん は おも しろか

「た　　って」
「よかつ　たね　ふ　たりで　ま　んざい　こんです　とに　で　れる
かもね」

二人はお互いの顔を見て笑っていましたが、急にこっちを向きま
した。

「あ　いそ　わ　ら　いが　ば　れ　ば　れで　チ　ロルちゃん　もお
もし　ろいね」

声が同時に聞こえました。

声がいつもの聞こえ方ではありません。
耳から聞こえるのではなく、脳に響くのです。
大きい声だったので脳が揺れます。

「うっ
うっ」

とっさに頭を押さえようと思いましたが、腕が動いてくれません。

金縛りにあっているように体がいうことをきいてくれません。です。

「チ　ロルちゃん　うっ」　けな　いよ
「だって　い　まから　死ぬ　のだもの」

「え!？」

チロルちゃんには何がなんだかわかりません。

「わたしはしにがみ」

「チロルちゃんはこの」

もう一人のチロルちゃんは自分のお腹を指差し、笑いました。

間髪入れず狐がチロルちゃんのお腹にグサッとためらいもなく包丁を刺しました。

内側からの尋常じゃないくらいの痛みに気が遠くなり、意識が飛びそうになります。

「あら、まだ死なないのね」

狐は手にしていた包丁を半回転させました。

チロルちゃんは立っていらなくなり倒れそうになりますが、耐えています。

「じかんがおしえてくれたでしょ」

もう一人のチロルちゃんが言いました。

外はまだ、しとしとと雨が降っています。
もう少しだけ、降りそうです。

おわり。

(後書き)

読み返したら病んでて笑いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0427/>

子パンダチロル

2011年1月28日06時40分発行